



第九回

いよいよ新年度！ 新米先生におくるメッセージ

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

希望に燃えて教壇に立たれた新米先生の皆さん。毎日の緊張感のなかにも、子どもとふれ合える日々には、新鮮な喜びと充実した思いを抱かれています。でしょう。

しかし、夢と希望をもって教職につかれたはずなのに、近年、一年もたらずして教壇を去ってしまう新米先生がめずらしくありません。そこには様々な理由があるでしょうが、少しでも心の余裕と張りをもっていただくために、私が初任者指導で気づいたことを書いてみたいと思います。

○「新米」仲間を大切に

どの地域でも最初の一年間は初任者研修がありますね。これを前向きに受け止めてほしいと思います。研修内容を吸収してほしいのはもちろんですが、ここで

申し上げたいのは、初任者同士が一年間ともに学び合うことの意味です。グループを組むこともあるでしょう。新米先生同士が、昔流に言えば、「同じ釜の飯を食う」わけですね。その仲間を大切にしてください。

ここで出会ったのは、ただの仲間ではありません。教職にある限り、定年まで付き合うことになる仲間です。かけがえない仲間、生涯の友ともなりうる仲間です。今は、悩みや不安などを共有しているはずですから、何でも打ち明け合い、助け合ったり励まし合ったりしていくとよいでしょう。

また、特に最初の一年間は、何もかも新鮮な半面、全ての話を真剣に聞いてしまおうと思います。何が自分に深くかわるのかわかりませんが、内容を理解するのに時間がかかるからです。ですから、すぐ疲れると思います。どうか、仕事の合間にもリラククスできる時間を設けてほしいと思います。

○まず自分で考えてから質問する

日々仕事をしていて、授業の進め方や児童理解の仕方など、わからなくなったり悩んだりすることがあるでしょう。そういう場合は先輩の指導を仰ぐわけですが、まずは初任者指導教員に質問することになると思います。しかし、学校全体

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のホームページ」でブログを執筆中。

学年全体にかかわることについては、指導教員にはわからないこともあり。その場合は、学年主任や教務主任などに聞くようにしましょう。

その時の聞き方ですが、「どうしたらいいでしょうか」と質問するのはよくありません。わからないので仕方ないとも言えますが、自分でもできる限り考えるようにしましょう。「私はこうやるというかなと思うのですが、それでいいでしょうか」というふうな質問できるとよいですね。主体的に取り組もうとしていることが先輩教員に伝わります。

○新米先生が陥りやすい五つの姿

長年初任者指導に携わっていると、新米先生にもいろいろなタイプがいることに気づきます。その中で気になるタイプがあります。それは、「まじめで真剣に取り組んでいるにもかかわらず、うまくいかない人」です。熱意があり一生懸命なだけに気の毒になってしまいます。そういう先生によくみられるのは、次のような姿です。

①何事も一生懸命です。いつも張りつめています。疲れはしないかと心配になります。子どもと冗談を言ったり軽い話をしたりして、リラックスする時間もつくりたいものです。

②責任感がとても強いです。何事も自分のせいにします。そんなに自分を責めると、心がポロポロになってしまうのではないかと心配になります。

③ベテラン教員と同じようにやろうとします。努力は認めますが、まずできないですよ。一歩一歩進むつもりでいいのには……と思います。その代わり、努力はずっと続けましょう。

④「〇年生の子どもはこうあるべき」と考え、それに達していない子どもを自分の思う線まで引き上げようとしてしまふ。そうすると思い通りにならないので、焦ってしまいます。

⑤自分の幼少期の小学校の経験が全てだと思ってしまうようです。勤務校の様子がそれと違うと驚いてしまいます。でも、いろいろあるのは当たり前なのです。

○自我にとらわれない

一生懸命なのも責任感があるのも、それ自体はすばらしい資質です。しかし、自分の感情や思いにとらわれすぎると、うまくいかなくなるようです。初任者研修や先輩の先生方の指導を柔軟に受け止め、幅広いものの感じ方・見方を身につけられるといいなと思います。

これは、「自我にとらわれない」ということでもあります。



例えば、先ほどの④の例で言えば、学校には教育目標があるので、目指すべき子ども像は厳然としてありますし、それに即して自分の目指す子ども像を考えるのは大切です。しかし、現実に自分の学級の子ども一人ひとりに、それを当てはめようとする、窮屈な学級経営になってしまいます。達成した子どもをほめる手がかりとするのはよいのですが、そうでない子については、とりあえず一歩でも歩むことができたならばめるといった気持ちが必要でしょう。

「五つの姿」に、もし当てはまるものがあるなら、それを初任者研修の個人テーマとしてみてはいかがでしょうか。